

日本近代小説の背骨

——佛教的思念（特に地獄）について——

藤井了諦

一

極楽に対する地獄のその語源は、梵語の捺落迦 (Naraka) とも泥黎 (Niruti) とも泥邏夜 (Niraya) ともいわれるが、要するに我々の立っている大地の下にある「地下の牢獄」であり、[△]衆生が生前の悪業によって懲罰を受ける場所[▽]と仏教では説いている。

では、どうして我々が我々の^{あし}跡で接している地下の世界が地獄なのであろうか。それはいうまでもなく、地下の世界が死者を葬る場所であり、死者が肉体とは別の人格的靈魂——死霊の住む場所と考えられ、それを恐れたからではなからうか。

我々が立っている大地は、万物の母であり、人間・動物・植物等すべてのものが生息し、寿命尽きれば万物の母なる大地の懷に還えてゆく

のである。しかも、人間は百分死を免れないものであり、その死が訪れた時、この大地に埋められ地下の世界に入るのだと感じた時、切実なものとして身近かに感じたのである。

では、その地獄思想の発生と、歴史はどうであろうか。いま、諸資料を参考にしてまとめてみたい。

一、古代宗教^{註1}——地獄は冥界のイメージが強い。

- (1) シュメールではクルヌギア (Kur-nu-gia)
- (2) カルデアではアラル (Arallu)
- (3) イスラエルではシェオール (Sheol)
- (4) ギリシアではハデス (Hades)
- (5) ゲルマンではヘル (Hel)
- (6) 日本では夜見 (ヨミ)

死者の行き場として考えられていた。

二、地獄思想は、メソポタミヤ地方に発生した。^{註2}

- (1) シュメール族の間に「戻ることのない国」(地下の陰気な国)の信仰があった。

バビロニア
アッシリアのアラッルー
ヘブライ族のシェーオール

と共にセム族が持っていた
地獄思想

- (2) ギリシア人の信じた地獄ハーデス
キリスト教徒の幽府(インフェルノ) 背景に成立

- (3) シュメール族の間に神話「イナンナ女神の冥府遍歴」がある。

- (4) バビロニアでは、右の神話を受け継ぎ「イシュタル女神の冥界の下降」とした。

- (5) さらに、その伝承がギリシア・ローマに伝えられ、いくつかの「冥界遍歴」の説話を生んだ。

- (6) 十三世紀にダンテの「神曲」の地獄篇となった。

三、インドにおける地獄信仰^{註3}

この国には、もともと地獄信仰(死后審判も含めて)はなく、後期ヴェーダ文献(西紀前七・八世紀以降)に地獄に関する事項が初めて見られる。この文献では「地獄遍歴譚」が物語化されている。

- (1) インドでは「地獄と死後審判思想」はヒンドウ教に伝承され、この影響を受けて仏教が地獄思想をとり入れた。

両者の違い
(地獄) 仏教 業報思想に基づいて報いを受ける場所
ヒンドウ教 死後審判の場所

- (2) 西暦二・三世紀頃から「正法念処經」「俱舍論」「観佛三昧經」「長阿含經」等多くの佛典に整理された地獄が見られるようになる。が、特に注意すべきは、仏教自体から地獄思想が発生したのではなく、ヒンドウ教やイラン方面の諸宗教の影響であることだ。

四、中国における地獄思想^{註4}

- (1) 中国では地獄思想という形でなく、善惡応報という表現で早くから行なわれていた。それは、例えば易に「積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃あり」とあり、又同じ易に「善を積まずんば以て名を成すに足らず、惡を積まずんば以て身を亡ぼすに足らず云々」(繫辭傳下)とあり、善因善果、惡因惡果の考えは佛教の影響によることなく、現世応報の考えを述べているのである。

これらを見ると、あの世——来世を考えていたことが分る。しかし、その後中国では「天は常に善人に與みす」とみてよいであろうかという疑問が投げかけられ、前漢の司馬遷などは伯夷・叔齊の不運を嘆き不満を述べたのである。が、この反論も、禍福は現世に限らないし、何を基準に福といふのかといった精神面の福が論じられ下火になった。

- (2) 一方、中国には古くから泰山府君の冥府信仰があったが、五世紀頃から仏教の地獄思想が入ってきたために、冥府信仰は衰微し

た。その後八世紀前半になって敦煌変文の「目蓮変文」などに地獄が描写され以後次第に地獄思想が広がっていった。

- (3) 中国の地獄は、中国人の道教的な空想に改変され、地獄の冥官や獄卒たちも中国の風俗に改められており、いわゆる中国式地獄であることに注目すべきであろう。

五、日本の地獄思想

- (1) 上代日本にあっては、地獄としてよりも冥界として夜見国（黄泉国）が存在した。そのことは、誰もが指摘する「古事記」の是に其の妹伊邪那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往き。爾に殿の膝戸より出で向かへし時、伊邪那岐命、語らひ詔りたまひしく、「愛しき我が那邇妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟へず。故、還るべし」とのりたまひき。爾に伊邪那美命答へ白ししく、「悔しきかも、速く来ずて、吾は黄泉戸喫為つ。然れども愛しき我が那勢の命入り来坐せる事恐し。故、還らむと欲ふを、且く黄泉神と相論はむ。我をな視たまひそ」とまをしき。如比白して其の殿の内に還り入りし間、甚久しく待ち難たまひき。故、左の御豆良に刺せる湯津津間櫓の男柱一箇取り闕きて、一つ火燭して入り見たまひし時、宇士多加礼許呂岐豆、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八はしらの雷神成り居り

き。

をみると明らかである。勿論、この話は「モガリ」の行事に根ざした話であり、上代日本人が「人間は死ぬ」と視、死体を凝視した場面である。

- (2) この死体の凝視は、やがて「死」に対する恐怖にかわり、その恐怖を理性の判断によって得た概念でイデア化したものが日本霊異記で、初めて「閻魔王」がここに登場することになり地獄が描かれるのである。その二・三を示すと、

イ、「往く前に極めて熱き鉄の柱立てり。『柱を抱け』といふ。光、就きて柱を抱けば、肉皆銷け爛れ、唯骨瑣のみ存れり。歷ること三日、使、弊れたる帟を以て、其の柱を撫でて『活きよ活きよ』と言へば、故の如く身生く。又北を指して往將くに、先に倍勝りて熱き銅の柱立てり。極めて熱き柱にして、惡に引かれ、猶就きて抱かむと欲ふ。言はく『抱け』といふ。即ち就きて抱けば身皆爛れ銷く。

ロ、又僧景戒が夢に見る事、延暦七年戊辰の春三月十七日乙丑の夜夢に見る。景戒が身死ぬる時に、薪を積みて死せる身を焼く。爰に景戒が魂神、身を焼く辺に立ちて見れば、意の如く焼け不るなり。即ち自ら楮を取り焼かるゝ己が身を策策キ枕に申キ、返し焼く。先に焼く他人に云ひ教へて言はく『我が如く能く焼け』といふ。己が身の脚膝節の骨、臂、頭、

皆焼かれて断れ落つ。」

ハ、俗家に居て、妻子を蓄へ養ふ物無く、菜食無く塩無く、衣無く薪無し。毎に万の物無くして、思ひ愁へて、我が心安くあら不。昼も復飢ゑ寒い、夜も復飢ゑ寒ゆ。我、先の世に布施の行を修せ不。鄙なるかな我が心、微しきかな我が行。」となるが、この場合の地獄での責苦は比較的軽い。ところが

(3) 平安時代に入って恵信僧都(源信)が「往生要集」を著わして、各種の御經の地獄を整理し詳しく分り易くしてから、一般に広く流布され今日に及んでいる。が、この往生要集によって地獄の概要が明確化され、単純化され残酷性が強調されることによって、当時の人を恐怖におとし入れたようである。よく引用されるが、例えば「枕草子」で清少納言は

御仏名のまたの日、地獄絵の屏風とりわたして、宮に御覽せさせ奉らせ給ふ。ゆゆしう、いみじきことかぎりなし。

「これ見よ、見よ」とおほせらるれど「さらに見待らじ」とて、ゆゆしさにうへやにかくれふしぬ。(八一段)

といっている。では、往生要集の地獄についてその一部を紹介してみよう。

イ、大文第一 厭離穢土者 夫三界無レ安 最可ニ厭離。今明ニ其相一 惣有ニ七種。一 地獄 二 餓鬼 三 畜生 四 阿修羅 五人 六 天 七 惣結。第一地獄亦分爲レ八。

一 等活 二 黒縄 三 衆合 四 叫喚 五 大叫喚 六 焦熱 七 大焦熱 八 無間。

口、初等活地獄者 在此閻浮提下一千由旬。縱広一万由旬。此中罪人互常懷二害心。若適相見如二獵者逢レ鹿各以二鉄爪而互齧裂。血肉既尽唯有二殘骨。或獄卒執鉄杖鉄棒從レ頭至レ足遍 皆打築。身軀破碎 猶如二沙撈。或以二極利刀二分分割。肉如二厨者屠二魚肉。涼風来吹尋 活 如レ故。歟然復起如レ前受レ苦。或云。空中有レ声云。此諸有情可レ還ニ等活。或云。獄卒以二鉄叉打地 唱云ニ活活一如レ是等苦不レ可ニ具述。

(已上依ニ智度論瑜伽論諸經要集撰レ之。)

ハ、二黒縄地獄者在ニ等活下。縱広同レ前。獄卒執ニ罪人ニ臥ニ熱鉄地。以ニ熱鉄縄ニ縱横 併レ身以ニ熱鉄斧ニ隨レ繩切割。或以二鉗解 或以二刀屠 作ニ百千段ニ散在。又懸ニ熱鉄縄ニ交横 無數 驅ニ罪人ニ令レ入ニ其中ニ惡風暴 吹交ニ絡其身ニ焼レ肉焦レ骨楚毒無レ極。

(已上瑜伽論知度論)

これらの例からみても、「往生要集」の地獄は因果応報を主としており、これを通して念仏行の必要性を説いたものと思われる。

註1 宗教学辞典(東京大学出版会)

註2・3 地獄と極楽―岩本裕(伝統と現代第2巻1号)

。註4 支那思想史—平原北堂著（勅語御下賜記念事業部刊）

。註5 往生要集のイ・ロ・ハの読み方は「源信 往生要集—花山勝友訳」

（徳間書店）但し送仮名は筆者が施す。

二

源信の著「往生要集」は、善因善果・惡因惡果という因果説によつて、多くの膨大な經典を引用して地獄を説明し、念仏及び極樂往生に対する考えを述べたもので、当時の末法説とあいまって非常に多くの人々に関心を持たれ、地獄の世界に畏怖せしめられた。そして多くの地獄圖が描かれもした。それだけに地獄は民衆の中に溶けこんだ。が、実体は極樂往生の手段として、念仏專修の方便として当時は地獄が説かれ、中世に入って戦争にぶちあたり戦争——修羅場と考え、地獄は人間の心に存在するものとの考えに変わってきた。ところが近世に入ると、徳川三百年の太平の夢は、その地獄を象徴的に捉え、見せ物として見せるようになった。特に寺・社の縁日や祭に小屋掛けで因果応報・輪廻思想を色々な形で見せたために、地獄思想は庶民の生活に深く根つき、多くの地獄をもとにした次のような生活用語が生れた。

- (イ)捕え殺す意—地獄落^{せと}。(ロ)苦惱の境界の意—「聞いて極樂、見て地獄」、「地獄で仏」。(ハ)ひどい扱いの意—「地獄詰^づ」。(ニ)逃げられない境地の意—「地獄」（私娼）、「地獄虫」（蟻地獄）。(ホ)超人的能力の

意—「地獄耳」。(ヘ)惡業が深い意—「地獄腹」。(ト)惡事をはたらく意

—「獄道」（極道）とも書く）。(チ)景観から—「地獄」

——（今成元昭氏「暮らしに生きる仏教語」に拠る。（有斐閣新書））

近代に入ると、欧米の新文化・新知識の流入によって、因果応報説は薄れ、僅かに節分の豆まきに鬼が登場する程度で、むしろ今日では一種の玩具にさえなり地獄思想は省みられなくなったといってもよからう。

地獄信仰が発生し、その地獄は我々の生存する社会と同じように実存すると素朴に考えられていた頃と違って、現代はすべての面が進歩して、地獄といえは何となく暗いイメージを持った自分達とは関係のないもののように思い、「今の科学の世に地獄なんて」と理解されないのが普通である。

しかし、如何に科学が進歩し、科学万能時代がおとずれようと、百パーセント死から人間は免れる事は不可能である。同時に人間は老・病からも免れないことは、四苦八苦の姿を冷静に凝視して出家したと伝えられる釈尊の時代から、ずっと少しも変わっていないのである。むしろ文明の進歩は、自動車や飛行機による事故死や、公害病患者を増やしてきている。人類の悲願である平和を希求しつつ、他方で原爆や水爆・ミサイルが増え、軍事拡大に狂奔し、世界各地で争いが絶えずして多くの尊い人命が失なわれ、不安は少しも解消されることがなく、むしろエスカレートしているのが世界の現実ではないだろうか。

身のまわりを見渡しても、目まぐるしい現代の世相は、我々に気楽に暮すことを許さず、複雑な家庭問題・職場での悩み等がとりまいて不安の中に生活しているといっても過言ではない。したがって、不安のない世界―極楽を昔の人が望んだのも納得出来る。そこで不安のない世界に行きたいと願ひ、そのためにはこの世で何をしたら一番よいかを考えるようになり、「この世における生の意義」が問われ真剣に討議され、研究され、結局「不安のない桃源郷(極楽)」に生れる素因を作ることがそれへの近道との結論が出された。そして、その「不安のない桃源郷(極楽)」とは対照的な「不安のある世界―苦の世界(地獄)」を創ることによって、その世界に生れないための努力がなされてきたし、今もこの人間が永久に克服出来ないといわれる病・老・死・欲をそれでも克服に向って努力し、よりよい社会、より住みやすい世界の実現に向って努力が続けられている。

「情緒・思想を想像の力を借り、言語または文字によって表現した芸術作品が文学^{註1}」とするならば、日本の近代作家達は、これらをどう表現してきたであろうか。

○註1 第二版増訂版
広辞苑 新村出編 (岩波書店刊)

三

イ

江州商人の世界を客観的に描いた作家外村繁は、彼自身の生涯の性欲史の究明^{註1}だといわれる作品「澤標」(昭三五・九「群像」)の中で、

私はお化^{ばけ}が恐しかった。鬼も恐しかった。幽霊も、人魂も、死びとも恐しかった。しかしそれ等の恐しいものは、決して暗いところにゐたやうで、もとより視覚的記憶はない。二丈坊や、ろくろっ首の記憶にしても、仮りにその形を描き得たとしても、それは後年の修飾である。しかし幼年期の、形のない、あの漠然とした恐怖の記憶は、今も臍^{へし}と、しかし確に残っている。……

幼年期の、このやうな覚束ない記憶の中に、今も極めて鮮明な印象を刻んでゐる、一つの記憶がある。地獄絵の中にゐる女亡者の姿である。

宇^{あき}の中央、観音寺山城の鬼門にあたると伝へられてゐるところに、小堂宇がある。一人の老尼が守つてゐる。春秋の彼岸会に、地獄極楽の絵が堂内に掛けられる。こんな小堂宇が所蔵してゐるものであるから、絵画としては勝^{すぐ}れたものではなからう。しかし私は文字通り戦慄^{せんりつ}した。

赤と黒の、あのあくどい色彩を背景にして、女亡者達はいづれも半裸体である。肌はまっ白に塗られ、短い、赤い腰巻をしてゐる。

……

と記している。この幼年期の体験と、後の「出家とその弟子」（倉田百三）との出会いが機縁となって「歎異抄」に傾倒させ、病に倒れた妻の看護——地獄の生活を描いた「夢幻泡影」（昭二四年「文芸春秋」）となったのである。更に昭和三十三年十一月に上顎腫瘍が発見され以後四年間の斗病生活を続け、その間にも色々と作品を発表した。しかも、その中再婚の妻も乳ガンにかかり再度の手術を受け、夫婦揃って放射線治療に通うという生活を送るのである。ガンという確実に迫り来る死の病を前にしての外村の心境は地獄であったといえよう。従って、その酸鼻な情景を描いた「汚穢」や「濡れにぞ濡れし」（昭三六・二「週刊現代」）は、そのまま「地獄」の描写といってもよからう。

「家」の問題を終生のテーマとした太宰治は、「思ひ出」（昭八・四・六七「海豹」）に

（たけは）お寺へ屢々^{しばしば}連れて行って、地獄・極楽の御絵掛^{おえかけ}地を見せ^て説明した。火を放^{はな}けた人は赤い火のめらめら燃えてゐる籠^{かご}を背負はされ、めかけ持った人は二つの首のある青い蛇にからだを巻かれて、せつながってゐた。血の池や、針の山や、無間^{むげん}奈落^{ならく}といふ白い煙のたちこめた底知れぬ深い穴や、到るところで、蒼白^{あざわか}く瘦^うせたひとたちが口を小さくあけて泣き叫んでゐた。嘘を吐けば地獄へ行^いってこのやうに鬼のために舌を抜かれるのだ、と聞かされたときには恐ろしくて泣き出した。

そのお寺の裏は小高い墓地になってゐて、山吹かなにかの生垣に

沿うてたくさん卒堵婆^{そとば}が林のやうに立ってゐた。卒堵婆には、満月ほどの大きさで車のやうな黒い鉄の輪のついてゐるのがあって、その輪をからから廻して、やがて、そのまま止ってじっと動かないならその廻した人は極楽へ行き、一旦とまりそうになってから、又からんと逆に廻れば地獄へ落ちる、とだけは言った。……の描写がある。

亀井勝一郎氏は、中原中也と太宰治の文学を評して^{註2}

中原中也こそ太宰治の先駆であつたように私には思われるからである。太宰の文学からひびいてくるのも、「汚れっちまった悲しみ」であり、後にそれは「罪の意識」と化した。太宰が晩年になって聖書にいいよ傾倒したように、中也はカトリックへおもむくのである。いずれも無頼派であり、同時に激しく深い祈りを秘めていた。

この二人に共通した点は「人間廢墟」という自覚ではなからうか。自分を「廢墟」と化して、そこに廢墟としての生命を涌出させようというかなしい演技がみられる。むろん虚構とのみ考えるのは不当だ。彼らの生の必然として殆んど生得的といつていいほど廢墟感がつきまといっている。……ところで私が今まで述べてきた点は、太宰文学の半面にすぎない。彼の作品に廢墟感の暗さのみ見るのは不当だ。……

といっているが、私はそれを肯定しつつも、他の作品で、太宰がつまり、自分には人間の営みといふものが未だに何もわかってゐない、といふ事になりさうです。自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食ひちがつてゐるやうな不安、自分はその不安のために夜々、転輾^{てんてん}し、呻吟^{しんしん}し、発狂^{はつきやう}しかけた事さへあります。自分はいったい幸福なのでせうか。……

つまり、わからないのです。隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見当がつかないのです。ブラクテカルな苦しみ、ただ、めしを食へたらそれで解決できる苦しみ、しかし、そこそ最も強い苦痛で、自分の例の十個の禍ひなど、吹っ飛んでしまふ程の、凄惨^{せいさん}な阿鼻地獄^{あびじやく}なのかも知れない、……

と描いている所を見ると、聖書に傾倒したとは云え、幼時の地獄観が彼の何処かに残っていたように思うのである。太宰の未来への危険・挫折・破局・喪失に対する不安が、この世を地獄と思惟し、不安を脱しようとして脱しきれなかった時「人間失格」となったのではなからうか。つまり、釈迦が「この世は生・死・老・苦」と喝破し、サルトルは「人間を不安感の苦しみだ」と云い、「人間そのものが苦」としたのと同様に、太宰も亦、亀井氏のいうように「人間廢墟」と自覚したのではなからうか。パスカルは「人間はひとり死ぬだけだろ」と述べ、誰も助けてはくれないのが人生であり、誰しも心に安らぎをえていないこと

を明示した。親鸞もまた「罪深き我々は、死ぬ時は一人だ」と人生を凝視し、その罪深く不安に悩む我々に念仏を与えた。太宰は「罪意識にさいなまれながら」も、この世を不可解な不安な世―地獄と見て、心の不安を除くことが出来ずして、人生にグット・バイを告げたのではなからうか。

○註1 日本近代文学大事典(講談社刊)

○註2 太宰 治集 日本文学全集(筑摩書房)「人と文学」

○註3 作品「人間失格」出典 註2と同じ

ロ

明治・大正・昭和の三代にわたって、文学史の上に大きな足跡を残した泉鏡花が書いた、神秘・幻怪な超現実的世界を描いた「高野聖」(明治三二・二「新小説」)をみてみよう。

其時は早や、夜がものに譬へると谷の底ちや、白癡^{ばか}がだらしない寝息も聞えなくなると、忽ち戸の外にものの氣勢^{きせき}がして来た。

獣^{けもの}の聲音^{おと}のやうで、然まで遠くの方から歩^{ある}行^{いく}いて来たのではないやう、猿^{さる}も、墓^{かぶ}も、居る処と、気休めに先づ考へたが、なか／＼何うして。

暫くすると今其奴^{そやつ}が正面の戸に近^{ちかづ}いたなと思つたのが、羊の鳴声になる。

私は其の方を枕にして居たのぢやから、つまり枕頭^{まくらもと}の戸外^{おもて}ぢやな。

暫くすると、右手の彼の紫陽花が咲いて居た其の花の下あたりで鳥の羽ばたきする音。

むささびか知らぬがきツ／＼といって屋の棟へ、懸て凡そ小山ほどあらうと氣取られるのが胸を圧すほどに近いて来て、牛が鳴いた、遠くの彼方からひた／＼と小刻に駆けて来るのは、二本足に草鞋を穿いた獣と思はれた、いやさまざまにむら／＼と家のぐるりを取巻いたやうで、二十三十のものの鼻息、羽音、中には囁いて居るのがある。恰も何よ、それ畜生道の地獄の絵を、月夜に映したやうな怪しの姿が板戸一重、魑魅魍魎といふのであらうか、ざわ／＼と木の葉が戦ぐ氣色だった。……

(二十三)

ここは、若い僧が山中の道を蛇や山蛭に苦しめながらやっと一軒家に辿りつき、一夜の宿を得た。その夜山中の一軒家を襲ってくる怪獣怪鳥の啼き声や羽搏きを描いたところであり、それは作者の記す「畜生道の地獄図」そのものである。これを描くことによって、作者は、この世には人間を脅やかす妖怪変化といった不可思議な力を持ったものもあるということを述べると共に、その不可抗力ともいべき鬼神力を、観音の力によって助けられた話である。ただ、その描写がそのものずばりの地獄図であり、外村や太宰の描写と違うことに注目すべきであろう。彼がこうした作品を書いたのは、熱心な信者であった父親や、お寺参りによる影響と考えてよからう。

次に鋭い美的感覚によって、数多くの短篇物を書き残した芥川龍之介

の最初の少年向き作品「蜘蛛の糸」(大七・七「赤い鳥」)をみてみよう。

或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしました。……

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を蔽ってゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のやうな水を徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るやうに、はっきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、韃陀多と云ふ男が、一人外の罪人と一しよに蠢いてゐる姿が、御眼に止りました。この韃陀多と云ふ男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございですが、それでもたった一つ善い事を致した覚えがございます。

……

これは、「蜘蛛の糸」の冒頭の文である。話は、「韃陀多が、かつて小さな蜘蛛を助けたことを思い出された釈迦が、蜘蛛の糸を地獄の底へまっすぐにおろされた。喜んだ韃陀多が一人でよじのぼり地獄からの脱出をはかった。が、そのよじのぼっている糸の先には数多の罪人共がブラ下っており、糸の切れるのを恐れた韃陀多は、『こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来

た下りろ。下りろ。』と叫ぶと、急に糸は犍陀多のぶら下っている所から切れた」となって終っている。

要するにこの話は悪人犍陀多が生前一匹の蜘蛛の命を助けたという理由、で釈迦に救われようとするが、自分一人だけ助かるうとする利己心（ここでは無慈悲な心）によって、再度地獄へ落ちるという因果物語である。勿論、この話はポール・ケラーズの作品「カルマ」所収の「蜘蛛の糸」を素材としたものといわれるが、いわゆる仏教の因果説に添ったものであり、エゴイズム——自分さえ救われたらよいという考えが、結局仲間は勿論のこと自分をも破滅に導くことを主題としたものである。

以上で、この小論を終えるが、実は、この小論は佛教文化研究所の所員研究発表会で発表したものを、稿を改めて記したものであることと、紙数の関係上、近代作家の作品が二・三に留ったことをお断りしたい。

なお、この稿を想いたった理由は、目を外にむけた時、軍備競争は劇しく戦争の危機をはらみ、一方国内に目を転ずれば、僧侶は仏を生活の手段にのみ用いるという墮落ぶりであり、青年は罪の恐ろしさ、命の尊さを知らず、暴力・いじめの問題や自殺問題は増える傾向にあり、平安末期の末法思想は、今こそ正にその文字通り終末の時期を迎えたと思うので、敢えて「地獄」について考え直してみた。